平成28年度
第3回川口市青少年問題協議会

平成２９年３月１０日（金）　午前１０時
川口市役所　議会３階　第３委員会室

次　　第

１　開　会

２　議　事

（1）「平成 27・28 年度川口市青少年問題協議会の報告と提案」について

（2）その他

３　閉　会

川口市青少年問題協議会概要

<table>
<tr><td>設置根拠法令等</td><td colspan="3">地方青少年問題協議会法・川口市青少年問題協議会条例</td></tr>
<tr><td>設置年月日</td><td colspan="3">昭和30年4月1日</td></tr>
<tr><td>所掌事務</td><td colspan="3">青少年の指導、育成、保護及び矯正に関する総合的施策の樹立につき必要な重要事項を調査審議すること。</td></tr>
<tr><td>委員数・任期</td><td colspan="3">15人・2年 （任期：平成27年6月1日～平成29年5月31日）</td></tr>
<tr><td rowspan="15">委員の氏名
（3月10日現在）</td><td>氏 名 ※敬称略</td><td colspan="2">備 考</td></tr>
<tr><td>樋 田 信 行</td><td>公募市民</td><td rowspan="2">市民</td></tr>
<tr><td>小柳 美佐子</td><td>公募市民</td></tr>
<tr><td>立 花 彪</td><td>川口市少年軟式野球連盟</td><td rowspan="8">青少年関係団体</td></tr>
<tr><td>須 賀 眞 一</td><td>川口商工会議所青年部OB会</td></tr>
<tr><td>平 田 敦 子</td><td>川口市民生委員児童委員協議会</td></tr>
<tr><td>舩 津 由 徳</td><td>川口市PTA連合会</td></tr>
<tr><td>中牟田 雅子</td><td>川口地区保護司会</td></tr>
<tr><td>姉 崎 祐 二</td><td>川口青年経済人連絡協議会</td></tr>
<tr><td>請川 かおり</td><td>川口商工会議所女性会</td></tr>
<tr><td>谷 口 正 夫</td><td>中学校長会</td><td rowspan="3">関係行政機関</td></tr>
<tr><td>川 島 将 宏</td><td>川口警察署生活安全課</td></tr>
<tr><td>新 木 孝 一</td><td>武南警察署生活安全課</td></tr>
<tr><td>栗 原 保</td><td>大学講師</td><td rowspan="3">知識経験者</td></tr>
<tr><td>芝 崎 正 太</td><td>市議会議員</td></tr>
<tr><td>若 谷 正 巳</td><td>市議会議員</td></tr>
</table>

平成２７・２８年度
川口市青少年問題協議会の
報告と提案

～青年リーダーの育成と地域の
関わり合いについて～

川口市青少年問題協議会

次第

１　現状と課題

（１）背景と経緯

（２）子どもと地域の関わり

（３）青年リーダーの育成・確保の検討

２　青年リーダー育成のための取り組み

（１）取り組みの状況

（２）地域における青年の活動の場づくり

モデルケース　南平公民館子どもクリスマス会

３　協議の経過と提案

［テーマ１］　青少年の中に「気づき」を生み、意識づくりに努めること

［テーマ２］　青少年にさらなる活動の場を与え、意欲と主体性を育てること

［テーマ３］　地域の大人が青少年を見守り、支え、次につなぐこと

１．現状と課題

（１）背景と経緯

○青少年における体験活動の意義と効果

体験活動は教育的効果が高く、幼少期から青年期まで多くの人とかかわりながら体験を積み重ねることにより、「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を養うという効果があり、社会で求められるコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、想像力、変化に対応する力、異なる他者と協働したりする能力等を育むためには、様々な体験活動が不可欠であるとされている（今後の青少年の体験活動の推進について（答申）。青少年対策室では、青少年の体験活動をとして、毎年各事業を実施している。

・青少年対策室主催事業

子ども自然体験村（８月）

通学合宿（１０月）

・川口市青少年団体連絡協議会主催事業

青少年まつり（６月）

戸田･蕨・川口三市青少年の船（３月）

○ボランティアスタッフの減少

青少年対策室が主催する各種事業の実施にあたっては、キャンプリーダーや生活指導者等、ボランティアの運営スタッフの存在が不可欠であるが、近年、その確保が難しくなっている。従前は、埼玉県の委嘱する青少年相談員が、その一翼を担っていたが、年々減少し、平成 26 年度において、本市における青少年相談員は１名のみとなっている。

○川口市青少年相談員登録者数及び実施事業数の推移

	H22	H23	H24	H25	H26
登録者数	5人	5人	5人	2人	2人
実施事業	4回	0回	1回	5回	0回

○青少年団体の若手指導者の欠如

市内で活動する青少年団体においては、指導者層の高齢化が進み、若手の指導者が育っていない状況がみられる。また、平成２６年度に実施した、「青少年指導者養成講習会」の参加者からは、青少年団体の抱える問題として、「次世代の担い手がいない」との声が多く寄せられた。

○若い世代の経験不足

戸田・蕨・川口三市青少年団体連絡会の主催する「三市青少年の船」事業に、班長や専門部員として参加した高校生から大学生の青年ボランティアからは、「子どもたちを指導するにあたり、経験を積み、スキルを高めたい」との声が聞かれた。

（２）地域と子どもとの関わり

		小学生	中学生	高校生	大学生	社会人
地域との関わり	団体活動	子ども会 ボーイスカウト ガールスカウト 少年野球 サッカー少年団 柔道、空手 など	ジュニアリーダー ボーイスカウト ガールスカウト 関わり薄い	ジュニアリーダー ボーイスカウト ガールスカウト	ジュニアリーダー ボーイスカウト ガールスカウト	ジュニアリーダー ボーイスカウト ガールスカウト
	体験活動	三市青少年の船 青少年まつり 子ども自然体験村 通学合宿		体験事業の指導者として参加	体験事業の指導者として参加	体験事業の指導者として参加
現状と課題		（現状） 小学校まではスポーツ少年団や子ども会の活動等、日常的に地域と関わっていた子どもが中学生になると、地域との関わりが極端に薄くなっている。 （課題） 小、中、高、大学生、社会人という縦の繋がりが途切れないような仕組み作りが必要。				

（３）青年リーダーの育成・確保の検討

若手指導者の不足や、経験不足をどのように解消すれば良いか、検討会を実施（川口市青少年団体連絡協議会、青少年相談員 OB、青少年対策室）。

検討会において、若手指導者となる人材（青年リーダー）を募集すること、集まった人達の活動の場として、具体的な事業を実施することが必要であるという意見があがり、また、青少年対策室には、若手指導者の募集に関する広報（広報かわぐち、ホームページによるＰＲ）、若手指導者の市や青少年団体の事業への参加（青少年まつり、通学合宿等の指導者として）について協力してもらいたいという意見があった。

このことから、青少年対策室では、若手指導者の養成と実践の機会を提供する事業として平成２７年度から検討会に参加している青少年相談員ＯＢの方々を講師として「地域の子どもたちのための青年ボランティア養成講習会」事業を実施することとなる。

２　青年リーダー育成のための取り組み

（１）取り組みの状況

<u>青年ボランティア養成講習会の開催</u>

平成２７年度

１　趣　　旨　　青少年の健全な育成に必要とされる体験活動において運営・指導にあたる次代を担うリーダー（青年ボランティア）を養成し、地域における青少年活動の活性化や新たな人材の確保につなげる。

２　主　　催　　川口市青少年保護育成本部

３　共　　催　　川口市青少年団体連絡協議会　　青少年会館

４　講習内容

日　程	時　間	講　習　内　容	会　場
５月１０日（日）	１３：３０ ～ １６：３０	開講式、ワークショップ （リーダーの役割・心構え、 子どもたちへのかかわり方）	青少年会館
５月２４日（日）		イベントで使える レクリエーション＆クラフト	
６月　７日（日）	8:00～17:00	青少年まつり参加 ～何か手伝ってみよう！～	グリーン センター
６月１４日（日）	13:30～16:30	体験活動における リスクマネジメント	婦人会館
７月　５日（日）	１３：３０ ～１６：３０	子ども対象イベントの企画 （川口市「七つの祝い」 ブース運営実施にむけて）	青少年会館

９月　６日（日）		子ども対象イベントの実施準備 （川口市「七つの祝い」 ブース運営実施にむけて）	
１０月１２日（月）	8:00～17:00	子ども対象イベントの実施 （川口市「七つの祝い」 ブース運営）	グリーン センター
１１月　１日（日）	13:30~16:30	「七つの祝い」のふりかえり これからの活動について 閉講式	青少年会館

○講師・ファシリテーター：
元埼玉県青少年相談員
NPO 法人自然体験活動推進協議会安全委員会委員(6/14 のみ)

５　受講対象　　体験活動の企画運営や青少年の育成指導に興味のある
１５歳から３０歳までのかた（平成２７年４月１日時点）

６　参加人数：９１名（延べ出席者数）

	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	7 回	8 回	計
中学生	2	2	3	1	3	1	3	3	18
高校生	7	5	5	2	1	2	4	4	30
大学・専門学生	3	4	3	1	1	2	2	2	18
社会人	5	2	4	2	4	3	3	2	25
計	17	13	15	6	9	8	12	11	91

平成２８年度

1　趣　　旨　　青少年の健全な育成に必要とされる体験活動を通じて、運営・指導にあたる次代を担うリーダー（青年ボランティア）を養成し、地域における青少年団体の活性化や自立化を図る。

2　目　　的　　参加者自らが事業を企画・運営し、イベントの企画運営方法や、子どもと一緒に遊ぶノウハウを学ぶ。また同時に、イベントを通して、同世代の新たな青年リーダーを確保・育成するもの。

3　主　　催　　川口市青少年保護育成本部

4　共　　催　　川口市青少年団体連絡協議会、川口市子ども会連絡協議会、川口市青少年相談員協議会

5　講習内容

日　程	時　間	講　習　内　容	会　　場
６月　５日（日）	9：00～ 16：00	青少年まつりでブース運営 ～青少年まつりで一緒に遊ぼう！～	グリーン センター
７月３１日（日）	9：00～ 16：00	デイキャンプ ～一日キャンプを体験しよう！！～	新郷自然の森
１０月１０日（日）	9：00～ 12：00	川口市七つの祝い ～手形スタンプでもみじをつくろう！～	グリーン センター
１２月１１日（日）	9：00～ 12：30	クリスマス会 ～子ども達と一緒にクリスマス会！！～	南平公民館

※青少年対策室と青少年相談員、子ども会鳩ヶ谷地区ジュニアリーダーが集まり、月１回の打合せ会議を実施

6　参 加 者

イベント参加者　延べ 58 人

	青少年 まつり	デイ キャンプ	七つの 祝い	クリス マス会	計
中学生	6	3	1	9	19
高校生	8	1	3	1	13
大学・ 専門学生	5	1	1	2	9
社会人	5	4	4	4	17
計	24	9	9	16	58

打合せ会議　全 14 回　延べ 110 人

★青少年相談員協議会が関わるその他の事業★

平成 28 年　3 月　焼きいも会の実施（協力：ボーイスカウト、ガールスカウト）
平成 28 年　6 月　アウトドア料理基礎研修会
10 月　戸塚西公民館地区通学合宿への参加協力
（主催：川口市青少年対策室）
戦没者追悼式への参加（主催：川口市福祉総務課）
芝西公民館地区通学合宿への参加協力
（主催：川口市青少年対策室）
11 月　芝中央小学校バザー会場への参加協力
（主催：芝中央小学校ＰＴＡ）
平成 29 年　1 月　さいたま市里親応援の集い参加協力（主催：さいたま市）

○川口市青少年相談員登録者数及び実施事業数の推移

	H24	H25	H26	H27	H28
登録者数	5 人	2 人	2 人	1 人	6 人
実施事業	1 回	5 回	0 回	1 回	10 回

（２）地域における青少年の活動の場づくり

南平公民館子どもクリスマス会

南平公民館地区青少年育成協議会が毎年１２月に実施しているクリスマス会を、青年リーダーが企画運営すると同時に、地域の中学生等にもリーダーとしての参加を呼びかけ、地域と一体となって事業を実施したもの。

日　　程：平成２８年１２月１１日（日）
時　　間：１０時～１２時
場　　所：南平公民館
主　　催：南平公民館地区青少年育成協議会
青年リーダー：青少年相談員、鳩ヶ谷地区ジュニアリーダー、元郷中学校
参 加 人 数 ：青年リーダー９名、中学生７名、小学生２３名

参加した青年リーダーの声

・初めての企画だったが、地域の中学生の力も借りてスムーズに進行でき、とても助かった。
・リーダー達と小学生だけでなく、地域の方も協力してくれたので、幅のある活動になった。このような輪を広げていきたい。
・初めての中学生も積極的に協力してくれて、とても盛り上がった。

参加した中学生たちの声

○地域でボランティアを体験して
・同年代とかかわりだけでなく、少し下の子とのかかわりを持つことで違う楽しさを実感できた。
・地域のイベントに参加していた子どもが多かった。
・普段は大人数の子どもと接することがなかったので緊張したけどとても接しやすく楽しかった。
・スノードームの作り方を教えてあげたらみんながすごく喜んでくれた。
・子どもと触れ合って楽しむことができた。
・小学生が楽しそうにしてくれた。
・みんなとてもフレンドリーにすぐに仲良くなれることができた。
・みんなとてもかわいかった。

○地域への愛着と今後の活動への意欲

・近所の子に親近感を抱けるようになった。
・妹の友達に仲良くすることができた。
・元々小さな子が好きだったけど、今まで以上に小さい子のことを考えて接せるようになった。
・小さい子に対して接し方が変わった。
・幼稚園実習でも生かすことができた。
・都合が合えばまた参加したい。
・このような機会は頼まれたらなんでも協力したい。

【事業を通じて見えてきたこと】

・青年リーダーの成長

イベント自体の企画運営は、青年リーダーだけで実施できるようになるなど、2年間の青年ボランティア養成講習会の経験を通した成長が見られた。今後も青年リーダーを中心に様々な事業の実施が期待できる。

・中学生の力

青年リーダーが少しサポートをすることで、初めての中学生も抵抗なく、事業に関わることができていた。参加した中学生からも、地域や今後の活動に対して肯定的な意見が出された。今後も地域で事業を実施する際は、地元の中学校、高校などに積極的に呼びかけることで、中高生が地域と関わるきっかけができる。

・青年を支える地域の力

今回は青少年育成協議会会長にサンタクロース役を担っていただくことで、地域の様々な世代が関わる事業として、より一層意義のあるものとなった。参加者である小学生や青年リーダーだけでなく、幅広い世代が関わることは事業の充実には非常に重要なことである。また、「地域の子どもは地域で守り育てる」という観点からも、育成協議会や青少年育成推進員をはじめとした団体や個人には地域の子どもや青年リーダーを育成する事業の中心となってもらうことが望ましい。

・公民館の持つ機能

今回の事業は育成協議会の事業で公民館と青少年対策室が協力して、青年リーダーへの呼びかけや、中学校へ参加の依頼等連絡調整をした。地域の人を一番よく知り、密接な関係性を持つ公民館がコーディネーター役となり、地域の大人や青年リーダーを、各事業を通じてつないでいくことで、地域が一体となった青少年健全育成活動が実現できると考えられる。

３　協議の経過と提案

［テーマ１］　青少年の中に「気づき」を生み、意識づくりに努めること

提案　青年リーダーの育成のためには、学校の部活動、町会・自治会や青少年団体の活動等を通して、青少年（特に中高生）に社会参加の機会を与え、動機づけを促すことが必要ではないか。

◆学校と地域の連携による社会参加活動の充実（地域のまつり、地場産業体験）

意識づくり

・学校が市役所のイベントのアナウンスをすると、学校側も責任を負わなくてはならなくなるが、それでも参加させたいと思わせ、そこに私達が介在していくことが、地域で子ども達を育てるということに必要なのだと思う。
・冬は部活をやっている中学１・２年生は時間がないが、３年生は受験期で、勉強に集中している子、また、集中しきれない子もこの時期いる。南平公民館のクリスマス会のチラシを何人かの３年生に渡したが、喜んでいる子もいた。なぜなら、午前中少し早起きして、子ども達と一緒に遊んで自分も楽しくて、地域のためになるボランティアをすることの成果を自分の経験値として結びつけられるなどの気持ちは、実は結構高い。
・体験活動をさせたり、挨拶をすることで、子どもたちが育っていくことは、間違いないと思う。
・「埼玉県青少年の意識と行動調査」によると子どもの面倒をみるようなボランティアをやりたいと思う中学生は、少ない現状である。しかしながら、福祉や環境、キャリア支援などの様々な活動を経験して次にボランティアへ行くということも十分ありえる。
・ボランティアに携わることは良いことだが、昔とは子ども達の技術も違うため、パフォーマンスとして出すのは難しいのではないか。

部活動を通して活動のきっかけに

・鳩ヶ谷の子ども会では、ジュニアリーダーの素養がありそうな子には、小学校卒業の２年くらい前から声をかけていた。育成していく上で難しいのは、高校生になると、リーダーの活動よりもアルバイトを優先する子が多くなること。中学校に、ジュニアリーダーの部活動があったら、もっといろんな子が育ったのかなと思う。
・中学生になると地域との関わりが薄くなるという話があったが、前回の会議で学校にジュニアリーダー部があると良いという意見があり、部活動のように立場や役割が与えられると胸を張って活動しやすくなるように感じる。
・小学生でやっていた種目を中学校へ行ってもクラブ活動で続けてくれる子がほ

とんどなので、中学校の帰宅の際、自分の所属していたチームの練習に入って教えてくれることがある。

地場産業体験を通した社会との関わり

・地域と若者の関わりということで、地域においては、盆踊りなどに若者が参加するという関わり方も一つあるが、若者に地域の地場産業の会社に見学にきてもらい、どんな仕事をやっているのか興味を持ってもらうという関わり方もある。
・青少年にとってキャリア支援教育というのを考えていくと、例えば、自分の生き方、ボランティア活動や他の小学生の面倒をみるという方向に関わってくる。そういう意味ではキャリア支援教育というスタンスから、建設現場へ青少年を受け入れるというのはすごく大きな事だと感じる。
・建設現場へ中学生が職場体験をするという前例はないと思うが、多くの企業が若手不足という課題を抱えているので、将来的な基礎を現段階から作っていくということも一つ良い提案だと感じる。

◆アプローチ方法の検討（回覧板、参加者への呼びかけ、学校行事の活用）

広報活動の必要性

・青年ボランティア養成講習会の周知については、さらに積極的に呼びかけるべき。子ども会同士の横のつながりで呼びかけてもらう事もできる。
・川口ロータリークラブでは、１３歳から１８歳位までを対象に、地域のリーダーを育てようという取り組みを行っている。しかしながら、中学生・高校生は学校行事の他、勉強や部活で忙しく、ボランティアをやりたくても時間がないというのが現状である。そういう子どもたちにとって、青年ボランティアというのは何なのかということをもっとわかってもらわないとなかなか参加したいというようにならないと感じる。この講習会があったことを知らなかったということがないくらい周知が必要だと感じる。
・学校応援団においても、どういう活動をしているか知ってもらう為には、チラシやリーフレットによる情報発信だけでなく、学校応援団ではこういうことをやっている、これが素晴らしいんだと語れる人物が必要である。

様々な形での情報発信方法

・先日、「小学校・中学校でこんなボランティアがあります」という案内が町会の回覧板でまわってきた。大人が案内を受け取れば、自分の子どもにやらせてみようということになる。大人の方から口火を切ってボランティアを勧めることも必要だと感じる。まずは、やらせてみる。次に、やってみせる。そして、一緒にやるということが大切である。
・今後の課題は、周知方法だと思う。行政主体で、これまで以上に発信していかないと、川口市が若手ボランティアを育成しているということが認知されない。

ＬＩＮＥの活用など、様々な形の発信を検討すべき。

活動中のＰＲ活動の方法

・11月に青年リーダーが参加したバザーの会場では、せっかくの青年リーダーの存在が、全く見えなかったので、もっと分かる様にしたらよいと感じる。
・私も若谷委員の意見に賛成する。七つの祝いの会場で、何も知らずにブースを見たら、とても楽しそうに活動している若者たちがいた。彼らがボランティアだということは分かったが、どういうボランティアかわからない。「青少年相談員」というネームバリューが届いてこない。この会議の席札の様に、名札や広報で工夫していくと、その子たちの活動の場所や居場所になると思う。

体験を通したＰＲの方法

・チラシなどの周知も大切なことだが、やはり目で見て、触れて、体験させることが重要である。例えば、学校のバザーで青年リーダーのブースを出したり、スクールキャンプやワンデイキャンプを行っている学校と協力して開催することで、青年ボランティアはどういうものかが伝わるので、今後のアプローチの方法として提案させていただく。

小学校入学前の保護者に対するＰＲ活動

・以前私が、主任児童委員や学校応援団の活動について話したいと校長に相談した際、「それなら、就学支援の機会に話してもらえれば」ということで、話させていただいた経験がある。それ以外でも、主任児童委員や学校応援団として懇談会などに参加し、そこで話をすることもできると思う。
・他市の事例だが、毎年１０月頃、来年度小学校に入学する子どもを対象にした健康診断があるが、その場で、保護者を対象に、約１時間の学習会を実施しているところがある。地域の活動について情報提供できるよい機会であり、テーマ３とも深く関わるのではないかと思う。

◆ボランティア教育と保護者の理解

学校のボランティア教育

・学校では、ボランティアがどういうものかということを教えるような授業はあるか。子どもたちがボランティアに触れる機会が少ないと感じる。ボランティアが何なのかわかれば、もっと興味を持つと感じる。
・昔は無償でするのがボランティアだったが、今は有償の部分も含めてボランティアという考え方もあり、定義するのは難しい。教育的な面だと、人の役に立ちましょう、という部分があり、環境教育であれば、ゴミ拾いをしましょう、ということになる。ボランティアを広く捉えて考える必要がある。どこまでがボランティアかという線引きは難しいが、学校では、校庭の清掃や福祉施設の慰問などを授業の中で行っている。

地域の活動を通したボランティア教育

・現在の鳩ヶ谷ジュニアリーダーは、小学生から育ててきた子どもたちが中学生・高校生に成長してきたと認識している。しかしながら、子どもが活動を続けるためには、保護者の理解が得られないと難しいと感じる。子どもはジュニアリーダー活動を楽しみにしていても、保護者は、ジュニアリーダーの活動を通して受験に有利になるとか、将来役に立つのかを考えている。ジュニアリーダーを育てるのには時間がかかるので、ジュニアリーダーがどういうものなのか保護者にわかってもらう必要がある。

・青年リーダーが継続していくためには、リーダーがリーダーを育てていくことが必要であるが、連絡がなかなか取れないリーダーも中にはいるので、やはり保護者の協力が大事である。

・鳩ヶ谷子ども会のジュニアリーダーなどの活動を見ても感じるが、お母さんたちは、「この人達は何かしら」と思っている様子。キャンプの引率でも、ジュニアリーダーは一緒に行くが、父兄は、この人たちについていって大丈夫なのかと、一抹の不安はあると思う。そういうこともあり、常日頃から、ジュニアリーダーを押すようにしている。総会の時などは、中高生には、きちんと制服を着てくる様に伝えている。常に父兄からどのように見られているか、気をつけるように教えた。
おしゃれをしたい年頃でもあり、その格好で活動ができるのかというような子もいる。その時々に必要なＴＰＯを教えながら、この子達に安心して任せられるということを周囲に伝えていく必要もあると思う。

活動に対する保護者の理解

・会場まで足を運ばせるのが大変だったり、保護者からは、勉強させたいのに、なぜ呼ぶのかという意見もある。そこは、事前説明が必要であり、保護者と生徒相互に納得できることが必要かと思う。

・保護者の理解ということでは、昔は、町会の集まりにも、子連れで、子どもを近くで遊ばせながら参加していた状況があり、子どもは、親の背中を見て、地域と関わるのは当然と思って育ってきた。また、保護者の意識改革の最大のチャンスは、幼稚園入園時や小・中学校入学時だと思う。自分の子どものためなら、自分もやらなくてはいけないと、どんな保護者にも思ってもらえるので、そういったチャンスを利用すれば、理解を深めることができると思う。

［テーマ２］　青少年にさらなる活動の場を与え、意欲と主体性を育てること

提案　様々な青少年が、良質な体験や経験を重ね、意欲や主体性を持って成長できるような活動の場を創出するためには、学校や地域、行政、青少年団体等の関わり方や、事業の実施方法を見直すことが必要ではないか。

◆学校・ＰＴＡ行事の活用

バザーやスクールキャンプなどへの参加

・学校のバザーで青年ボランティアのブースを出したり、スクールキャンプやワンデイキャンプを行っている学校と協力して開催することで、青年ボランティアはどういうものかが伝わるので、今後のアプローチの方法として提案させていただく。
・芝中央小学校の青年リーダーのバザー参加はとても良い試みだった。できれば、他の学校のＰＴＡのバザーにも関わりを持てれば良いと思う。
・柳崎町会のラジオ体操では、在家や芝東中学校の中学生が、お手本として前に並んで体操をしているが、こういうことも、活動のきっかけとなる。いくら中学生が忙しいといっても、朝の６時半から忙しい子はいないと思う。

小学校と中学校の連携

・学校を離れたところで、子ども達がどう活動できるか。鳩ヶ谷中学校では、中学生が小学校に行き、近隣の掃除を一緒にするなど、兄弟校の様な関係が作られている。そういう取り組みを授業の一環として行うことにより、一緒に活動することが普通と思ってもらうことも大事。塾や部活などで、なかなか自由な時間が取れない子が多く、学校の授業などで取り組めば、子ども達も動きやすいのではないか。災害発生時などは、地域の中で一番力になるのは、中学生の力である。中学校と小学校の繋がりや、中学生と地域との繋がりから、ボランティアというものを自然に考えられるようになるのではないかと思う。
・青年リーダーの募集のチラシ作成を学校の美術部やパソコン部にお願いすれば、素敵な物ができるし、自分の作品なら、見に来たりもするだろう。
　青年リーダーのビデオを高校生に撮ってもらっても良い。その後の編集などもお願いすれば、高校としても、ボランティアのポイントとなる。今は映像の時代なので、活動の様子をビジュアルで訴えていくことは、効果的だと思う。広報、参加、報告の３点で関わる方法もよいと思う。

ＰＴＡ連合会との連携

・例えば、ＰＴＡ連合会の会議で青少年相談員のブース運営の話をしてみてはどうか。本協議会には、ＰＴＡ連合会の会長もいらっしゃるので、来年度のバザーや模擬店などへの出店等の提案を通じて、宣伝を行うこともできるのではないかと感じた。

◆体験事業の実施方法の検討（通学合宿ボランティア）

・通学合宿については、並木小学校ではお泊り合宿をやっており、成功している。通学合宿は公民館地区単位で実施するため、知らない子と仲良くなれるのは良いことだが、学校単位で、知っている子同士でやることも大事かなと思う。
・通学合宿に関しては、指導する内容を提示しながら生活指導者を探せば、１時間でも２時間でも参加できるという人が増えると思う。また、指導者同士の繋がりで、やってくれる方は増えるのではないかと思うので、提案させていただく。
・平田委員から、視点を変えたらどうかとの意見が出されたが、会場となる公民館が決まった時点で運営審議会にかけ、実施方法等について議論してもらうのも一つの手かなと思う。青少年育成協議会も地域差があるようなので。
・地域の中では、我々が知らない団体でも、活発に活動をしているところは多いので、そういった団体と連携しながらでないと、若手の育成はなかなか難しいのではないか。生活スタイルが多様化し、通学合宿もそうだが、事業自体が形骸化しているように思える。

◆多様な青少年への働きかけの検討（外国人、非行少年、困難を抱える青少年）

・川口は全国でも有数の外国人が多く住む都市である。川口に住む外国人も取り込んで、青少年健全育成に取り組んでもらいたい。
・職場体験というのは、受け入れる企業としては負担となる面もあるが、青少年にとって良い社会経験の場となる。特に、非行少年にとって、そういった社会経験をさせることは必要に感じる。
・保護司会においても、社会的に認められていない人たちにボランティア活動をさせて達成感を持たせようという取り組みがある。また、今回の講習会のアンケートを見ると企画から携わって実践したことが良かったとあり、企画から取り組む事によって達成感を得られると次に繋がるのではないかなと感じた。

［テーマ３］　地域の大人が青少年を見守り、支え、次につなぐこと

提案　学校や地域、行政、青少年団体等の積極的な連携など、大人同士の関わりがよりよく変化することが、地域における青少年の健全育成や、次代を担う青年リーダーの育成にとって必要ではないか。

◆家庭・学校・地域の連携強化（学校応援団、おやじの会、トップのあり方）

地域と学校との関わり

・学校が地域との関わりについてどのように考えているか情報を公開していけば、さまざまな活動について地域と話し合うことができる。やはり、学校のトップの意識で変わっていくと感じる。
・おやじの会や学校応援団以外にもＰＴＡが活発で、学校の色々な行事に協力してもらっている。しかしながら、自分の子どもが卒業してしまうと、学校に関わりづらくなり、継続されていかないと感じている。安行中学校には、教育後援会という組織があり、卒業生の保護者も関われる仕組みがある。ただし、ずっと学校に関わっていくことはできないので、何年かで交代していくというのは、やむを得ないと感じる。
・学校によっては、学校応援団や地域との関わりが苦手な先生もいる。そうすると、地域と学校の距離がどんどん遠くなってしまう。距離が近ければ、学校の様々な問題の解決の糸口も見つかりやすい。
・教育後援会という組織が既にできている学校では、新しく学校応援団を作っていない学校もある。子どもを私立の学校に通わせた保護者が地域の学校と関わりたいといった場合、その学校の教育後援会に入る資格がない為、その学校には関われないということもある。教育後援会は学校へ資金援助も行っており、なかなか学校応援団を作るのに悩ましい学校もある。
・芝地区では、おやじの会が主催で、柳崎小・芝中央小でスクールキャンプを実施している。芝南小では、ワンデイキャンプをやろうかという話が出ている。また、学校同士は上手く連携がとれているが、学校と行政は取れていない。それが課題だと思う。
・芝東中学校では、現任のＰＴＡ会長が卒業したら教育後援会の会長に就任するという仕組みを作ったところ、今まで関わりが無かった後援会から資金援助を受けることが決まった。ＰＴＡ会長を経験した方が後援会の会長になることで何が必要かを理解していただいたと感じる。
・知っている範囲での話だが、安行地区などで学校が荒れていた当時、ある校長先生が、「うちの生徒は違う」と正義感に燃えて、学校から盆踊りなどの地域の行事に手伝いとして参加した。今では、地域との関わりで表彰される事例もある。青木地区でも、学校の周年事業に、町会から「お金を使ってください」ということもあり、関心が高いと感じている。ただ、どう関わっていけばよいかと、町会のほうが学校に気を使っているように感じる。川口市全体としては、

学校と地域との関わりはあると思う。

地域性の違いによる難しさ

・地域性の違いによって上手く回っている所とそうでないところはある。また、学校応援団や教育後援会などがどういう活動をやっていけばよいかも地域によって変わってくる。
・川口では地域性がかなり違う。地元で働く保護者が少ない地域では、学校応援団が作りづらいのが現状である。学校応援団を上手に作っている校長というのは一言で言うと甘え上手である。行事の際にも上手く学校応援団を活用している。やはり学校のトップの意識だと感じる。
・地域によって温度差を感じる。学校応援団やおやじの会などに参加できる方、できない方の差が出てきてしまうのが現状だと感じる。
・地域差があると思うが、育成協議会は名前だけで、活動はあまりやっていないところもある。同様に、子ども会も盛んでないところがあるなど、地域によってかなり土壌が違うので、地域別戦略を考えないといけないのではと感じる。川口市全体で同じマニュアルに当てはめても、一方は取り残され、一方はよい形に進んでいくことになりかねない。

小中学校の違い

・運動会の準備でテントを建てる際は、小学校では子どもが自分でできない部分が多いので、保護者の方に手伝いをお願いしている。それが中学校になると、子どもだけでできるようになるので、保護者が学校に入ってくる場が狭まってくるように感じる。また、安行中学校では元々、教育後援会があり、その上で新しく学校応援団を作ったが、なるべく後援会と応援団の隔たりをなくすような姿勢で取り組んでいた。

多様な団体との連携

・前川の公園では、プレイリーダーが昔遊びを行っており、若い子も何人かいたが、そういう団体と連携してはどうか。
・教育後援会は、その学校を卒業した地元の方たちで構成しており、学校のために資金援助や意見する立場にあるようである。
・主任児童委員は、目には見えない、困っている家庭の子どもをなんとかしてもらう方々であり、ちょっと業務が違うのかなと感じる。
・民生委員というと、高齢の方を対象にする印象があるかもしれないが、民生児童委員というのが正式名称であり、児童にも関わっている。その中で、主任児童委員は、子どもに関する事件が多発する中、例えば、学校や地域と連携する場合など、高齢の方より子どもに関してもっと情報を知り得る人が間に入った方が良いということで、存在している。業務としては、子どもに特化しているが、関わることは民生委員と同じである。例えば、見守り家庭の子どもの具合が悪い時など、主任児童委員に連絡が来たりする。ネグレクトや暴力などの情

報も様々なところから入ってくる。基本、地域の中で児童に関することは、全て見ていく。学校応援団やコーディネーターもいるので、地域と学校に関わる方の見守る目が多い方が良く、広い視野で見ることができる方が良い。

学校と地域との話し合いの場づくり

・地域の立場、学校の立場、どちらも理解できるが、お互いに受身である印象を持つ。例えば、盆踊りは地域のイベントなので、学校側から見れば、地域から参加を呼びかけてくれれば良いということになる。話し合いの場を持って、お互いにできることを出し合うのはどうか。また、部活を新しく作るのは難しく、地域と関わるということで組織を新たに増やすことも難しい。それよりも、まずは地域と学校との話し合いであると感じる

・谷口委員から、「話し合いの場を」というご意見があったとのことだが、各学校には、学校評議委員が評価する場合があり、学期に１回は会議があるはずである。中学校によって多少異なるかもしれないが、ローテーションで、町会・自治会長が参加している。その会議が、地域と学校が関わる提案の場にもなる。地域でやって欲しいこと、学校でやれることの提案や調整の場が、そこで作れるのではないかと感じる。

・先ほど、学校と地域、どちらが積極的に動くかという話があったが、私は、学校側であると思う。学校長が積極的に地域に関わりなさいといって、町会の運動会にも、多くの先生方が参加している例がある。公民館の文化祭にも参加している。最近では、町会の婦人部が学校の家庭科の授業を見に来たり、公民館の茶道部に子ども達が体験に行ったりするなど、学校と地域との関わりがとても深くなった。地域側がいくら言っても、学校の先生が動かなければ、何も始まらない。逆に、学校が言っても、地域がその気にならなければということもいえるかもしれないが、どちらが先かといえば、「地域の皆さんで子ども達を見守ってください」という学校側の発信力の強さが、地域を動かすのだと思う。

公民館（行政）の役割

・公民館で積極的な事業をということだが、私の印象では、学校と地域の関係はかなり薄いと思う。町会の会員数も減っている現状で、学校との関わりを求めていくのは難しい。昔と違い、防犯面から部外者の立ち入りを禁止するなど、仰々しい時代。地域と学校との気軽な連携は互いに難しい。そこを仲介するのは公民館ではないか。私の地元でも、公民館、町会、自治会が音頭を取ってお祭をしている。まだ数回しかできていないが、学校に周知し、今年はだいぶ子ども保護者が来るようになった。校長先生やＰＴＡに周知したことが効果があったのではないかとの話だった。そこが良いコミュニケーションの場になって、学生と地域に保護者も加わる。保護者は地域とのかかわりを持ちたがっているので、定期的なお祭りには、パイプ役として一番よいのではと感じる。ただ、立ち上げる人は、かなりエネルギーが必要であるし、誰か一人やってくれる人を期待するだけでは成り立たない。そこで、市で斡旋というか、音頭を取って

関わってもらえると、地域全体で考えられることになると思う。
・公民館を事務局として、青少年育成協議会が組織され、青少年育成協議会には町会・自治会長や各種団体も入っている。そういう意味では、青少年育成協議会が、その役割を担っていけるのではないか。
・基本的に、公民館の事業は前例踏襲、当然、地域の方に了解は得ているが、去年の事業のままということが多く、活発に事業を見直すには厳しい印象がある。ボトムアップ式に新しい事業を入れていくという体制、新しい事業を提案できるような形にすればよいのではないかと思う。

◆あいさつは大人から（大人が変われば子どもも変わる）

保護者のあいさつ

・実際の話だが、少年団のいくつかのチームには、酷い指導者がおり、試合中に相手の選手を攻撃するようなことを言う。保護者も同じように攻撃するため、子どもたちもまねをする。地域活動に参加していれば、良い子になるというのは、全体で言えばそうかもしれないが、若干そうでない部分もある。まさに、大人が変われば子どもも変わるということである。
・親と子どものコミュニケーションができていないように感じる。例えば、同じ部屋にいる親子がＬＩＮＥで会話をするということが、実際にあると聞いたことがある。まずは、親子でコミュニケーションを図っていかなければ、その先はないのではないかと思う。
・あいさつ運動について言えば、まず、お母さんたちが挨拶しない。学校の先生も挨拶しない。私は、柳崎小のＰＴＡ会長になった時から、入学説明会で、「まず、みなさん挨拶しましょう」、それと「子どもの前で学校の悪口を言わないこと。言った時点で、子どもは学校のことを信用しなくなる」、それを言い続けている。大人同士がもっと挨拶をするということが大切だと思う。それを見て子どもは挨拶するようになると思う。
・私たちが、パトロールをする格好で、部活帰りのお子さんを待つ親御さんに「こんばんは」と言っても、「私たちは関係ない」という顔をされる。習い事とは関係ない人だからという感じで。パトロールの格好をしているのだから、せめて大人同士、何をしているかはわかるのではないかと思うが、やはり、親が変わらなければ、子どもも変わっていかないと思う。
・スポーツ少年団の小学生については、各団の指導者が挨拶を指導しており、徹底されている。ただ、逆に、父兄が全然挨拶をしない。大人同士でも、挨拶がなかなか出来ていない。大人が挨拶をしないから、中学生になると、子どももしなくなってしまう。大人が積極的に参加すれば変わると思う。

大人の意識を変える

・私は、リーダーは育っていると思う。川口は部活動も盛んであり、そういう

子がリーダーになれば、何とかできると思う。子どもに任せられない大人の側にこそ問題があるのではないか。

・大人が変われば、子どもも変わるということは、一貫して言えると思う。

・先ほど、ラジオ体操での中学生のお手本の話があったが、たしかに、ある町会ではやっている。しかし、町会の子ども会の大人がリーダーになってやっているので、なかなか、子どもが前に出てやるということは難しい。私も、２カ所に出させてもらったが、子ども達にやらせてと言ってもダメ。大人が自分でやらないとダメ。掃除など、大人がやっていれば、黙っていても子どももやる。ボランティアには、無償も有償もあるから、お金を出して子どもを指導することもできる。

・保護者の立場、見方に立って、リーダー養成をしていく必要もある。だからこそ、支える体制が必要というところだと思う。

・指導者が熱くなりすぎて、体罰や暴言を吐いて問題になることがあり、父兄がまねしてしまうこともある。父兄には、練習後、家に帰ってから、子どもとよく話をするように言っている。スポーツ少年団には倫理委員会というものがあり、種目別に、父兄を集めて、倫理についての講習を少しずつやっていこうという形で、大人の方が倫理を一生懸命勉強しながら指導している状況である。

子どものあいさつ

・８年間、スクールガードとして、ビブスをつけて通学路に立っているが、その格好だから、子どもたちも挨拶するわけで、普段の格好で挨拶をすると、子どもたちはほとんど挨拶しない。知っている人には挨拶するが、知らない人には挨拶しない。知らない人にはついていってはいけないという指導もあるが、そこにギャップを感じている。

・あいさつ運動については、私も、朝、学校の前に立っているが、先日、日本こどもの安全教育総合研究所の宮田先生の講演があり、「不審者には近づかないように」とはいうものの、やはり、学校では、「人にはやさしく、挨拶はしよう」という風に教えていただきたいということだった。そこで、人間風船といって、両手を広げた空間が人にとって気持ちの良い距離感であり、その距離感をお互いに保ったまま挨拶すると、気持ちの良い挨拶ができると教えていただいたので、それを学校の方でもご指導していただけたらと思う。元郷南小の体験活動でも、気持ちの良い距離感を教え、体験させたところ、子どもたちからの反応が良かった。挨拶は大事で、やるべきだと思うので、たとえ挨拶されなくても、声を掛けていくことが大人の使命だと思う。学校の方でも、指導していただけたら、根付いていくと思う。

・川口市は人口や世帯数が増えているというが、色々な役職を受ける人たちはいつも同じ。身近な町会が高齢化して、次の方に引き継がれていない。全体がうまいバランスで動いておらず、コミュニティが回っていないということを感じる。

子どもを褒めること、叱ること

・青少年をもっと褒めてほしいと思う。役職を担う人材がいないのは、次のリーダーを育てなかったから。リーダーを育てるのは、上の人の役目である。例えば、キャンプに参加した子が中学生になったら、指導者として参加してもらえばよい。失敗しても、責任は大人がとればよい。子どもたちには夢を与えたい。

・リーダー育成事業をなぜやるのかと考えることは、地域における大人のあり方を考えることにつながる。何をやって青少年を育成していくのか、という原点に立ち返り、考えることが重要だと思う。体験活動をさせたり、挨拶をすることで、子どもたちが育っていくことは、間違いないと思う。褒めることが大事だという話があったが、まさにその通りで、今の子どもたちをみていると、自分に自信がない子が多い。「自分はどういう役に立っているのだろう」と意識する子はまだよいが、そういう感覚すらない子が多い。学校の部活動などは、一つの場として有効と考えられるが、いつも指導されたり、褒められたりという、指導者と子どもの関係だけではなく、地域に出て行くことによって、違った視点から子どもたちが認められる、あるいは、役割を与えられるということは、非常に大事な部分であると思う。

・褒めることが大事だという話があったが、まさにその通りで、今の子どもたちをみていると、自分に自信がない子が多い。「自分はどういう役に立っているのだろう」と意識する子はまだよいが、そういう感覚すらない子が多い。学校の部活動などは、一つの場として有効と考えられるが、いつも指導されたり、褒められたりという、指導者と子どもの関係だけではなく、地域に出て行くことによって、違った視点から子どもたちが認められる、あるいは、役割を与えられるということは、非常に大事な部分であると思う。

・ここに携わっている方には、自分が、こういうところに、誰のために立っているのか、子ども達にも、「君がやっていることは、こういうことにつながっていくんだよ」ということを伝えて欲しい。若谷委員や芝﨑委員をはじめ、皆さんがお話される、子ども達に対する色々な話を各委員がそれぞれの場所に持ち帰り、「僕も頑張っているけど、君も頑張っているね」という形で、褒めるところをたくさん増やして、「あなたがいることがありがたい」ということを伝えていただきたい。例えば、小中の連携ということで、元郷中学校、領家中学校、元郷小学校、領家小学校、元郷南小学校では、中学生が、小学校に凱旋するような形で行き、あいさつ運動を行っている。６年生の時には怒られてばっかりいたけど、中１になって、学ランを着てあいさつ運動をするときに、「こんなこともできるようになったのね」と先生方は褒めてくれる。先日、姉崎委員と、職業体験で土木建築の様子を少しでも知っていただきたいということで、中学校を訪問したが、本来であれば、色々な手間のかかる３日間のうち、１日でも良いので、子ども達に体験をさせたいということを言っていただける方もいた。そう言っていただける方が当たり前ではなくて、私達には、他の方に伝えていくという役目もあると思う。褒めるだけでなく、認めて、育て、それを見守っていくという流れをこの提言の中に盛り込んでいただきたい。

・「中高生の意識と行動調査」の３番目の質問のところで、「よく叱られる」が３４％とあるが、これは良いことだと思う。叱ってくれる大人がいるということは、褒めてくれる大人がいるということ。こういう地域は素晴らしいと感じる。外に高齢者がもっといれば良いと思うが、最近は、高齢者は公園にもいない。年配者が出て来られるような公園を作りたいと言っても、なかなか難しい。叱る人は褒めてくれる。問題なのは無関心層。褒めない、叱らないでは、リーダーもなかなか育たないと思う。

その他　添付資料

・中高生の意識と行動調査　アンケート結果

・青年ボランティア養成講習会　アンケート結果